

## 「残したい音風景 100 選」自治体アンケートの結果報告

このパンフレットは、私どもが行った「残したい“日本の音風景 100 選”」（以下 100 選と略記）事業に関するアンケート調査にご協力頂いた自治体の皆様への結果報告です。

### ○「100 選」とは

「100 選」は 1996 年に環境庁（当時）によって実施された事業です。「全国各地で人々が地域のシンボルとして大切にしている音風景が公募され、738 件の応募のなかから、その内容や全体のバランスを考慮して 100 件の音風景が選定されました。事業の主なねらいは「日常生活の中で耳を澄ませば聞こえてくる様々な音についての再発見を促す」こと、「良好な音環境を保全するための地域に根ざした取組を支援する」こととされています。

### ○私どもの調査について

音風景が選定されてから 20 年後の状況をその波及的な効果等も含めて調べる目的で、選定された音風景がある自治体にアンケートを実施いたしました。調査概要は下記の通りです。

【実施の主体】サウンドスケープ政策研究会（山梨県立大学 箕浦一哉、関西大学 大門信也、青山学院大学 鳥越けい子）

【方法・時期】郵送法（一部メールで回答を受付）。2017 年 1 月 27 日送付、2 月 17 日締切。

【回収の状況】複数の音風景が選定されている自治体、および複数の自治体にまたがる音風景があるため、調査対象数は 113 件となった。そのうち、2 月 20 日時点で 82 件回収。再度調査依頼を郵送するなどし、5 月 30 日までに 103 件からの回答を得た。

【質問の内容】(1)音風景の現状について、(2)自治体独自の取り組み（周知・保全・活用）について、(3)市民団体の取り組みについて、(4)商業関連団体の取り組みについて、(5)総合的な評価について。

【連絡先】〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学社会学部 大門研究室  
Email:sdaimon@kansai-u.ac.jp URL: [http://mino.eco.coocan.jp/wp/?page\\_id=99](http://mino.eco.coocan.jp/wp/?page_id=99)

## 1 音風景の現状

現在でも音風景を体験できるかどうかという問いに対して、「いいえ」と回答したのは 5 件のみでした。その 5 件に、音風景が体験できなくなった時期と理由を尋ねたところ、表 1 のような回答が寄せられました。

（※岡城跡の松籟は、選定当初から立ち枯れの危機が関係者に知られていましたが、地域の人たちの記憶に松籟の音をとどめようという意図から選定されたという経緯があります。）

表 1 体験できなくなった音風景（問 2, 問 3）

音風景	時期	理由
「太平山あじさい坂の雨蛙」	5～10 年前	自然環境の変化等による消滅
「水琴亭の水琴窟」	5～10 年前	私有施設の閉鎖により立入不可に
「室戸岬・御厨人窟の波音」	1～5 年前	危険なため立入禁止に
「岡城跡の松籟」	10 年以上前	自然環境の変化等により消滅
「千頭川の溪流とトロッコ」	10 年以上前	産業の変化により消滅

## 2 自治体の取り組み

### ■ 全体の傾向

残したい音風景に関する自治体の取り組みについて、「周知しているか」（問4）、「保全しているか」（問5）、「活用しているか」（問6）の3つの観点から尋ねました。

それぞれの質問項目の選択肢のなかには「とくに何もしていない」「とくに活用していない」が含まれます。図1には、これらの選択肢に○をつけた回答者の数をもとに、何かひとつでも取り組みを行っているか、取り組みを行っていないかの比率を示しました。「周知しているか」「保全しているか」「活用しているか」のそれぞれについての青色、橙色、緑色の3本の棒グラフと、すべてのカテゴリーにわたって何かひとつでも取り組んだことがあるか、何も取り組んでいないかを示す黒色の棒グラフが並んでいます。

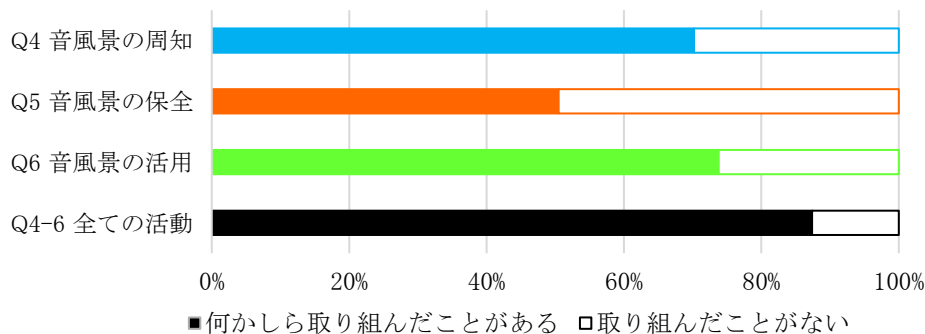


図1 過去にひとつでも取り組みを行ったことがあるかないか（問4-6、問5-7、問6-6）

これより約9割の自治体が、どれかしらのカテゴリーについて、何かひとつはこれまでに取り組みを行っていると回答していることがわかります。また、カテゴリー間の差をみると、「活用」（緑色）したことがある自治体をもっとも多く、「周知」（青色）したことがある自治体が次に多いです。「保全」（橙色）に取り組んだことのある自治体が最も少なく、約5割となっています。

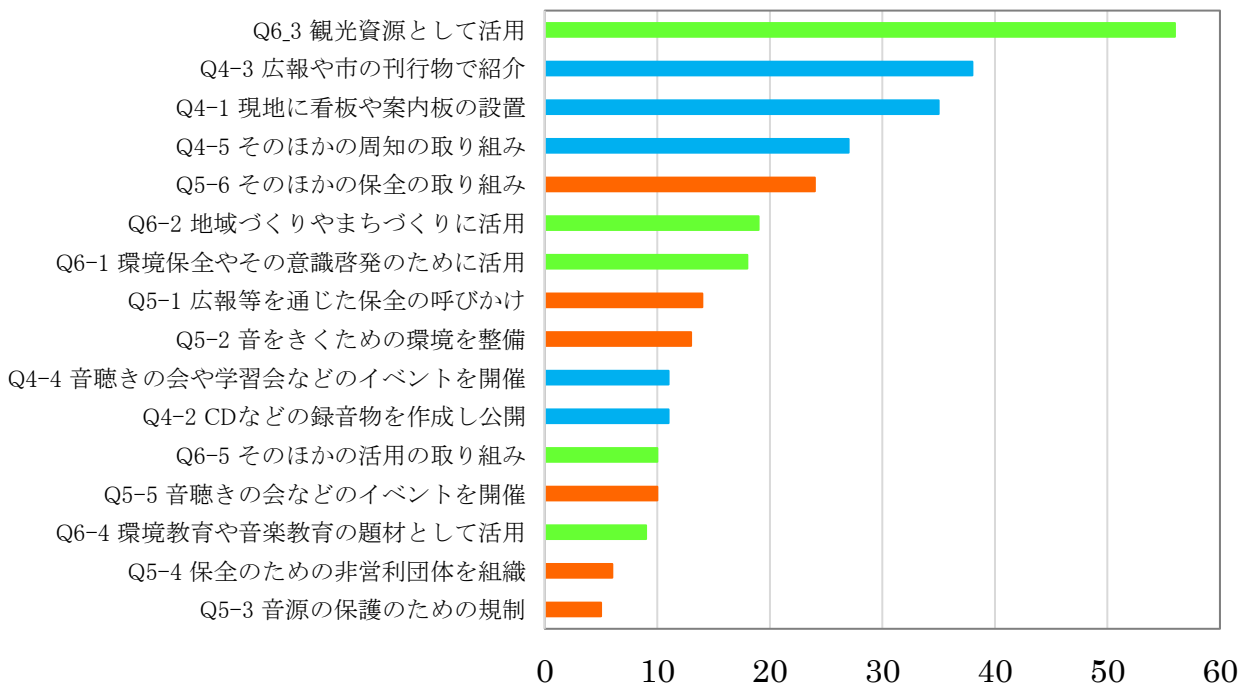


図2 「周知」「保全」「活用」すべての設問に回答数（問4、問5、問6）

図2は、より詳しい分析を行うために、周知・保全・活用の3つのカテゴリーすべての設問をまとめて、回答（○をつけた項目）が多い順に並べたものです。なお無回答は集計から除外しました。

まず1位の「観光資源として活用」への回答が突出しており、回答率は5割を超えています。しかし、他の「活用」に関する質問項目（緑色）の順位は相対的に低いです。他方で「周知」に関する取り組み（青色）が2位から4位と上位に位置しています。とくに2位の「広報や市の刊行物で紹介」と3位の「現地に看板や案内板を設置」への回答は3割を超え、4位の「そのほかの周知の取り組み」への回答は2割を超えています。

以上から、多くの自治体が、残したい音風景を観光資源として活用しようとしてきたことがわかります。ただし、ほかの活用の仕方は必ずしも多くなされていないようです。これに対して、周知に関する取り組みは、全体として実施しやすい傾向があることがわかります。そして、保全は、ほかに比べて最も取り組みにくいことがうかがえます。

## ■ 積極的な取り組み事例

これまで全体の傾向を見てきましたが、全体の傾向としては少数の事例であっても、より積極的な取り組みが行われている音風景に着目してみましょう。

周知に関する問4と保全に関する問5では、「音聴きの会」を開催しているかどうかについて尋ねています。それぞれへの回答を、音源別に分類したところ、表2の結果が得られました。

表2 「音聴きの会や学習会」で周知（問4-4、問5-5）

鳥や虫の声	宮城野のスズムシ（仙台市）	
	荒川・押切の虫の声（熊谷市）	
	塩嶺の小鳥のさえずり（岡谷市）	
	本多の森の蝉時雨（金沢市）	
	道保川公園のせせらぎと野鳥の声（相模原市）	問4のみ
	福島潟のヒシクイ（新潟市）	問4のみ
	荒川・押切の虫の声（熊谷市）	問5のみ
尾山のヒメハルゼミ（糸魚川市）	問5のみ	
草木の音	風の松原（能代市）	
	北上川河口のヨシ原（石巻市）	
鐘の音	時計台の鐘（札幌市）	
	寺町寺院群の鐘（金沢市）	
伝統的な祭り	ねぶた祭・ねぶたまつり（青森市）	

「音聴きの会」は、市民の環境への「気づき」を大切にする100選事業の精神に即した、より積極的な取り組みといえますが、鳥や虫の声に関して会を開催している場合が多いことがわかります。虫の声を“noise”ではなく風情ある風景としてみなしてきた伝統的な日本文化を反映しているようです。また数は少ないものの、草木の音を聴く会が開催されている点も興味深い点です。

（※宮城野のスズムシは、市民団体からの応募で「100選」に選出されたという経緯があります。）

## 3 市民の取り組み

音風景に関して何か取り組んでいる市民団体について尋ねました。ただし、この回答には、回答者の質問への解釈の違いが含まれており、音風景を主題にしている団体を回答したものと、音風景を主題にしていなが関連している団体を回答したものがあるようでした。そこでここでは、「ある／ない」の比率（問7）ではなく、団体名に関する回答（問8）をもとに、表3の通り活動内容のひろがりやを整理しました。

団体名から推測すると、活動団体には大きくわけて2つあるようです。ひとつは、伝統的な社会組織や、商工会などの既存団体に基盤があると思われる協会や委員会や保存会といった団体です。もうひとつは、「まちづくり」等、既存の社会組織や団体に比べて、比較的新しく組織されたと考えられる市民団体です。

(※ただし両者には厳格な区別はなく、双方の特徴を有した団体もあると思われます。あくまでも回答された団体名からの推測ですので、今後、現地調査などでこの点を明確にする必要があります。)

表3 残された音風景に関連する団体 (問8)

伝統文化や観光に関わる既存の団体	伝統文化振興組織	「～祭実行委員会」「～保存会」「～伝承委員会」「～実行協議会」「～振興協会」といった、伝統文化を振興したり、運営したりする団体・組織。
	伝統的祭礼組織	「氏子総代会」や「取締役会」など、祭礼等を取り行うために組織されてきた伝統的な地域組織。
	同業者集団	伝統産業の生産にかかわる同業者協同組合。
	半官半民組織	公益財団の運営する自然保護センター(音風景のコーナーを設置)、SLの保全に関する協議会(自治体が事務局)。
	野鳥保護団体	鳥やその保護に関連する愛好団体。
	観光振興団体	音風景の対象となった観光地やコンテンツに関連する観光協会、ツーリズム協会、振興会など。
まちづくり等に関連する市民団体	地域自然保護団体	スズムシやホタル、ヨシ原や松原などの、動植物を保全するための市民団体。 <u>100選以前から鳴き声の保全を標榜してイベントを実施してきた団体や、100選選定以降に、形成されたり、音風景をテーマとするイベントを行うようになった団体が含まれる。また、鳴き声が聞こえる時期に開催される句会が存在したが現在はなくなったとの記述もあった。</u>
	まちづくり組織	主に梵鐘や時の鐘に関連するまちづくり組織。町並み保全を主たる目的とするものから、鐘そのものの愛好会もある。 <u>鐘つきボランティアや、「どこまで聞こえる？」といった音を使ったイベントの開催など、音やその保全を明示的に扱ったことがある団体が含まれる。</u>
	そのほか	SL 保全のための市民応援団、ボランティアガイド、シルバー振興事業団などといった音風景に関連したボランティア組織。

それぞれの組織の内容をみると、「まちづくり等に関連する市民団体」のほうに、より直接的に音風景に関する取り組みを行っている団体が多い様子が見えられます(表3 下線部を参照)。

またひとつの自治体から、以前存在した句読みの会がなくなっているという証言がありました(表3 太字下線部を参照)。これは、音風景は保全されていても、それを味わう「主体」や「文化」が廃れていることを示唆しており、「100選」の精神にもとづくならば憂慮すべき事態といえます。

## 4 総合的な評価等

100選に選定されたことについての総合的評価を尋ねたところ(問12)、表4のような自由記述が得られました。

内容を分類すると、(1)地域の知名度が向上したという内容、(2)観光資源のひとつになり、経済効果が見込まれるという内容、(3)観光化することにより環境保全効果が望めるとする内容、(4)外部からの評価(選定)や外部の観光者の目(耳)を通じて、地域のアイデンティティが育まれるという内容、(5)外部からの評価(選定)によって、市民の活動が生まれたという内容、(6)これまでにない新しい質の価値への気づきや活動が生まれる可能性についての内容、となっています。

また最後に、本調査そのものやその他100選に関連することについて自由な回答を求めたところ(問13)、表5のような回答が得られました。回答は、上記の総合的評価が肯定的な内容についての記述を求めていることを反映して、逆に否定的な側面(限界や課題など)についての記述が多くあげられています。

表4 100選の総合的な評価(問12)

知名度の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「流氷鳴り」という特有の現象を、広く認知していただける効果があった。</li> <li>・20年近く経った今でもカジカガエルを聴きたいという問合せ等があり地域の魅力の一つになっている。</li> <li>・直接、野鳥の生態管理を行っていないが、植物園内の維持管理の結果、野鳥が飛来することにより植物のみならず、それらを目的に来園される方もいるように見受けられること。</li> </ul>
観光資源のひとつ・経済効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観光PRとして「ハク」がついている。</li> <li>・観光資源として全国の方に興味を持って頂ける。</li> <li>・「残したい音風景」へ選定された付加価値による観光資源としてのブランドの向上。</li> <li>・選定により観光資源として活用され、公園利用者数の増加に結びついている。</li> <li>・選定にあたり「鳴門のうずしお」が周知されることで、より多くの観光客が鳴門市を訪れるきっかけになった。</li> </ul>
観光化と環境保全	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主に観光業を通して、環境保護啓発されている。</li> <li>・五浦海岸の波音を聞くために、観光客が訪れることにより、あわせて市内の施設や観光地に立ち寄ってもらえる。残したい音風景に選ばれていることで、その環境を壊すことなく将来へと残していける。</li> <li>・PR効果になり、より魅力的な水鳥の観察施設、観光施設として認識され、市民・事業者団体などによるボランティア清掃等、環境保全意識の向上につながっている。</li> </ul>
外部からの評価とローカルアイデンティティの涵養・意識の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市民として地域の宝であることを再認識し、誇れるものを守るべきものという意識が高まった。伝統を大事にするという意識づけに役立っているものと思われる。</li> <li>・選定により、より市外の方の認知度が上がった。曳山関係者も曳山囃子を後世にのこすよう、より意識するようになった。</li> <li>・音風景100選に選定されたことによって、より多くの市民に保全していくべき身近な風景に気付いてもらうことができ、文化の継承、さらには地域づくりへつながっていると考える。</li> </ul>
選定をきっかけとした市民活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音風景100選の他、かおり風景100選等の6つの日本100選に認定されているが、このことによりその価値が見直され、官民による環境整備・保全の取り組みが行われるようになった。また、市民有志による関連団体も発足し、環境保全活動や環境学習の場として活用される等、市民の環境保全意識の醸成に役立っている。</li> </ul>
新しい質の体験、新しい自然資源の利用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・季節の移ろいを体感でき、自然に親しみをもつ契機となる。</li> <li>・伊豆沼・内沼はラムサール条約に指定されている湿地である。音風景100選に選定されているという理由で訪れている観光客は少ないと思われるものの、訪れた観光客に音風景100選に選ばれていることも説明している。説明を通じ、音の面からも伊豆沼・内沼の自然に関心を持ってもらえているものと考えられる。</li> <li>・コンサートの開催等を通じて、音風景という福島潟の新たな楽しみ方をする人が徐々に増えてきた。福島潟の自然保護意識が高まった。</li> <li>・みやざきツーデーマーチ。こばやし霧島連山絶景ウォークのコースとして使われたりしています。メディアに取り上げられる事もありました。</li> </ul>

※表内の自由記述の文章は、回答で得られた原文に一部編集を加えたものです。

## 5 まとめ

### ■ 自治体等の取り組みの状況

- ・積極的な取り組みを行っている自治体は多くないものの、何らかの取り組みをひとつでも行っている自治体は9割を超えていた。
- ・「活用」については観光資源としての活用が突出して多い。
- ・「周知」については相対的に多様な取り組みがなされている。
- ・「保全」に関する取り組みは少ない。「いかに保全するか」についての方法の開発が必要である。

### ■ 積極的な保全・活用のとりくみ事例

- ・少数ながら存在する積極的な取り組みのひとつである「虫聴きの会」については、生き物の音を扱った事例が多い。逆に祭りなどはとくにそれに特化した活動は少ない。
- ・市民団体を中心に、音風景に特化した活動が散見される。「草木の音」のようなささやかな音風景でも、地域アイデンティティとも関連づけながら、音聴きの会のような市民活動が行われている。

表5 そのほか気づいたことなど（問13）

かなり利用している	<ul style="list-style-type: none"> <li>カエルの声を選ばれているということ、ビジターセンターでかなり「利用」している。グッズを作ったり、ビジターセンターの制服にモチーフとして用いたり…。八島湿原のひとつのポイントになっていると感じる。</li> </ul>
今後周知・活用していきたい	<ul style="list-style-type: none"> <li>地元団体を含め、当市では活用した取り組みがあまりなかったため、今後は音をきくための環境整備をはじめ、各情報媒体を通してのPRなど、様々な面で活用していきたい。</li> <li>せっかく選定されているので今後観光PR、また文化の伝承という形で祭保存会と連携して周知していきたい。</li> </ul>
今後活用の予定がある	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成29年度より生物多様性保全推進事業として、カジカガエルやカッコウ、スズムシなどを手がかりに、市民の自然や生きものに対する愛着や理解を深める取組を行う予定である。HP等で音がきける生息地マップの公開等も考えている。</li> </ul>
音に特化して活用されていない	<ul style="list-style-type: none"> <li>音風景の対象となった動物の鳴き声は観光資源として活用されているが、特に「日本の音風景100選」として活用されているわけではない。</li> </ul>
具体性に欠けていて政策展開できない	<ul style="list-style-type: none"> <li>「100選への選定＝景観のいいところ」など具体的なイメージにつながっていない</li> <li>100選として選ばれたものについて、選んだ側（現・環境省）が何か活用しようとしているのか、または選ばれた地域等に対して何か期待していることがあるのかを知りたい。</li> </ul>
現場状況が原因で活用しにくい	<ul style="list-style-type: none"> <li>自然現象のため状態を常に把握するのが難しい。以前はこまかく調査が地元で行われていたが今はない。</li> <li>情報提供をしようとしても、音の再現がされるか不確かなため取り組みに活用しにくいのが現状。</li> </ul>
過去のことで部署としての記録が確認できない	<ul style="list-style-type: none"> <li>選定当時には、市民へ広報等をしたものと思われるが、当時の記録が残っておらず、広報の詳細や観光・地域づくりへの活用についての詳細が不明である。</li> </ul>
自治体の管轄外にある	<ul style="list-style-type: none"> <li>私有地にあるため自治体としては特に関与していない</li> <li>河川敷の周知や保全、取り組みについては、河川公園が行っている。</li> </ul>
音環境保全の危機	<ul style="list-style-type: none"> <li>東日本大震災に伴う地盤沈下により、潮の満ち引き波の長さ等の条件が揃わなければ音が聞こえにくくなっている。</li> <li>現在虫が自生することは難しく、飼育、繁殖させた虫をケース展示やイベント前に公園へ放虫することで対応している。</li> </ul>
効果の低減	<ul style="list-style-type: none"> <li>「音風景100選」というネームバリュー自体が薄れてきている。全体的な情報発信のための定期的なイベント等あればありがたい。</li> </ul>
騒音問題との葛藤	<ul style="list-style-type: none"> <li>「新年を迎える船の汽笛」は年間行事の一つですが、みなとの風物詩として大切にしたいと考えています。しかし、同様の年間行事である納涼祭や除夜の鐘の音が騒音として苦情が寄せられることもあり、音をめぐる価値観が多様化する中で公平中立を求められる行政の立場としては慎重にならざるを得ないこともあります。</li> </ul>

※表内の自由記述の文章は、回答で得られた原文に一部編集を加えたものです。

## ■ 100選をより活かすための課題

- 保全状況が悪化している音風景は必ずしも多くないが、自然資源については、表5の「音環境保全への危機」に関する記述が示すように、今後災害や気候変動等の影響も懸念される。
- 句会が行われなくなったという記述から、音風景を積極的に味わう文化が薄れている可能性が示唆された。
- 選定から20年過ぎて、関心が薄れているという反応がある一方で、生物多様性の観点から、自然保護センターのような場での関心が高まっている様子がうかがえた。
- 取り組みの方法やそもそもの目的がわからないという声も得られた。他の地域にも参考になるような、各地域の取り組みを共有するための工夫が必要である。

以上、簡単ですがアンケートの結果を一部抜粋するかたちでまとめました。巻末にはすべての設問で得られた回答数と比率を示しましたので、あわせてご参照ください。

今後、ここで得られた結果をふまえ、私たちの研究会では、地域の環境や文化をよりよく保全・活用できる政策や施策について研究を進めて参ります。調査へのご協力にあらためて感謝申し上げます。

# 「残したい“日本の音風景 100 選”」に関する現状調査

## 【単純集計結果】

調査主体：サウンドスケープ政策研究会  
(日本サウンドスケープ協会ワーキンググループ)

103 件の回答者から得られた単純集計の結果を示します（自由記述は省略）。

### ●貴自治体の《残したい音風景》の現状について

1. 貴自治体の《残したい音風景》を現在も現地で体験することができますか。(n=103 件)

1. はい 95 件 (92%)      2. いいえ 6 件 (6%)      ・無回答 2 件 (2%)

2. 【1. で「2. いいえ」と回答された方におたずねします】音風景を体験できなくなったのは今からどの位前のことでしょうか。あてはまる番号に一つだけ○をつけてください。(n=6 件)

1. 1 年未満      1 件 (17%)      2. 5 年未満      1 件 (17%)  
3. 10 年未満      2 件 (33%)      4. 10 年以上前      2 件 (33%)

3. 【1. で「2. いいえ」と回答された方におたずねします】なぜ体験できなくなったのでしょうか。下記の枠内にできるだけ具体的に書きください。

省略

### ●自治体の取り組みについて

4. 貴自治体は、《残したい音風景》に関して、市民への周知を行っていますか。過去に行っていたものも含め、あてはまる番号すべてに○をつけてください。(n=103 件)

1. 現地に看板や案内板を立てる      35 件 (34%)  
2. CD などの録音物を制作し公開する      11 件 (11%)  
3. 広報や市の刊行物で紹介する      38 件 (37%)  
4. 音聴きの会や学習会などのイベントを開催する      11 件 (11%)  
5. そのほか      27 件 (26%)  
6. とくに行っていない      31 件 (30%)

5. 貴自治体は、《残したい音風景》の保全のために下記のような取り組みを行っていますか。過去に行っていたことも含め、あてはまる番号すべてに○をつけてください。(n=103 件)

1. 広報等を通じて保全を呼びかける      14 件 (14%)  
2. 音をきくための環境を整備する      13 件 (13%)  
3. 音源の保護のための規制をおこなう      5 件 (5%)  
4. 保全のための非営利団体を組織する      6 件 (6%)  
5. 音聴きの会などのイベントを開催する      10 件 (10%)  
6. そのほか      24 件 (23%)  
7. とくに行っていない      31 件 (30%)

6. 貴自治体は、《残したい音風景》を何等かの形で活用していますか。過去に行っていたことも含め、あてはまる番号すべてに○をつけてください。(n=103件)

- |                          |           |
|--------------------------|-----------|
| 1. 環境保全やその意識啓発のために活用している | 18件 (17%) |
| 2. 地域づくりやまちづくりに活用している    | 19件 (18%) |
| 3. 観光資源として活用している         | 56件 (54%) |
| 4. 環境教育や音楽教育の題材として活用している | 9件 (9%)   |
| 5. そのほか                  | 9件 (9%)   |
| 6. とくに活用していない            | 28件 (29%) |

●市民主体の取り組みについて

7. 貴自治体の《残したい音風景》に関わっている市民主体の取り組みや組織は存在しますか。過去に存在していたものも含め、把握されている範囲でお答えください。(n=103件)

1. はい 37件 (36%)      2. いいえ 65件 (63%)      ・無回答 1件 (1%)

8. 【7. で「はい」と回答された方におたずねします】特定の市民団体があれば具体名をお書きください。

省略

●経済面での取り組みについて

9. 地元の経済的な団体（企業や商工会など）は貴自治体の《残したい音風景》を観光資源として活用していますか。過去に行われていたことも含め、把握されている範囲でお答えください。(n=103)

1. はい 43件 (42%)      2. いいえ 12 (29%)      ・無回答 5 (5%)

10. 【9. で「はい」と回答された方におたずねします】それはどのような活動ですか。あてはまる番号に一つだけ○をつけてください。(n=42件)

- |                        |           |
|------------------------|-----------|
| 1. 観光ガイドに載せる           | 20件 (48%) |
| 2. 現地ツアーを行う（ルートに含めている） | 12件 (29%) |
| 3. そのほか                | 7件 (17%)  |
| ・無効・無回答                | 3件 (7%)   |

●総合的な効果

11. 総合的にみて、貴自治体の《残したい音風景》の選定によって、地域への良い効果が生じていると思われますか。(n=103件)

1. はい 65件 (63%)      2. いいえ 36件 (35%)      ・無回答 2件 (2%)

12. 【11. で「1. はい」と回答された方におたずねします】選定によって生じた効果あるいは波及的效果について、できるだけ具体的にお書きください。

省略

13. 最後に、「残された音風景」に関することで感じておられること、また本調査についてのご意見やお気づきになったことがあれば、ご自由にお書きください。

省略